

四年に一度の踊りを披露

小塩御福田田植え踊り



「小塩御福田田植え踊り」とは、小塩地区に江戸時代から伝わる豊作の祈りをこめた踊りで、地中で眠る田の神を起す場面からはじまり、田植えや収穫などの動きを題材にしています。4年に一度、うるう年に地区内の新築や結婚などの祝いごとがあった家で披露され、町指定無形文化財になっています。



見物客の誉め言葉に対し返す言葉

まず、小塩田植え踊り保存会（以下、保存会）の渡邊会長は「座敷に上がるのは全国的に見ても珍しい。おそろく小塩だけだろう」と話していました。二つ目は踊りを中断すること。小塩では、踊りが盛り上がるのと、踊り手に対し見物客から誉め言葉がかります。すると「同びたりと踊りを中断してしまうのですが、踊りが終わったわけではありません。場が静まり返る中、前列の踊り手が「誉めていただき嬉しいが、今は踊りの途中なので後で改めてお礼をする」という旨の言葉を返すと、再び賑やかな踊りがはじまります。

田植え踊りの流れ

小塩御福田田植え踊りは町指定無形文化財です。小塩地区だけでなく、町の宝として後世に引き継いでいくため、田植え踊り行事の一連の流れを学びましょう。



田植え踊り当日、法印は案内役を先にたて、若頭を従えて慶事のあった家々を回ります。



家に着くと、神棚の前で祭文をあげ、五穀豊穰・無病息災の祈りをします。



祈りが終わると、若頭の持ってきた箱からお守りとなる「虫除け札」を取り出し、家の主人に手渡します。



家の主人から神酒を振舞われたら、法印はぐいっと飲み干します。



法印一行が去ると、今度は入れ替わりで賑やかな踊り手の一行がやってきます。



法印の祈祈によって清められた場で、田の神の使いとして豊作を祈願する踊りを披露します。

今年の法印



法印は誰にでも勤まるわけではありませぬ。保存会の渡邊会長によると「体格がよく、法螺貝を吹けるような肺活量があり、しかも神酒をグイグイと飲み干せるようなお酒の強い方でなければならぬ」とのこと。

今年法印に選ばれたのは、それらの条件を満たす渡邊剛啓さん（小塩3）。堂々とした姿で家々を回り、五穀豊穰などの祈祈をしました。

ごり水垢離で身を清める

2月11日の夜、田植え踊り行事の前に身を清めるため、踊り手が水垢離を行いました。撒いた水が数分で凍ってしまうほどの厳しい冷え込みの中、大きな声で気合を入れ、一気に水をかぶる踊り手の皆さん。水をかぶるたびに、見学していた方たちも悲鳴や歓声をあげ、明日行われる踊りへの期待を高めていました。



伝統芸能を地区の誇りに



田植え踊り保存会会長 渡邊英一郎さん

各地で後継者不足に悩む中、常に20人以上のメンバーがそろっているという小塩田植え踊り保存会。今年には3名の青年が踊り手として初めての舞台に立ちました。

保存会の渡邊会長は、「会

長が会を仕切るのではなく、メンバー全員で協力して会の運営をしており、新しいメンバーは同年代の友人同士で誘い合っている。そして何より、地区全体で田植え踊りを大切にしており、小塩の青年は田植え踊りを踊れることを誇りに思っている。これらが後継者が絶えない理由だと思えます」と話していました。特色に富んだ小塩の田植え踊り。今後も長く伝承して欲しいものです。



踊りが披露される家や公民館には、子どもからお年寄りまでたくさんのお見学者が集まりました。地区全体で田植え踊りを大切にしていることが分かります。



佐藤和夫さんご家族

「今年は家族が踊るということで見学にきました。堂々としていてとても迫力があった」3代続いて踊り手になっているという佐藤さんご家族は、そろって見学に来てくれました。

左から渡辺久子さん、ツヨエさん、光子さん、小松常子さん

「すばらしい踊りだった。田植え踊りは地区の宝。後継者を絶やさず、後世に引き継いで欲しい」



左から下山稜太郎くん、小松桜子ちゃん、下山ひなのちゃん

「棒を持って踊るところがすごくかっこよかった。大きくなったら一緒に踊ってみたい」